





天は真は——る

鶴峯戊申著

神代傳來の真義ジンダイデンライ シンギも今日事實ジジツ小徴チウとてひとり天地
國土の説の諸説紛々として學者惑マドさるるすまらざるべ
故小今カイダイダン海内談天は説と通考フウカウ以てこれを神世傳來の真
義ギ小徴チウと同學ドウガクは士小徴チウとてまじらざるべ

天朝テンテウして天を言ひの八人智の建立コンリウせる処小ありんばテンチキハシハイ天地判割の
時トキと神人相傳シンジンアヒツタフる處の趣オモムキありて此説テンムテイ天武帝チウホウは勅語チウゴ小出てゲン元
明ミョウ帝テイは和銅元年ワドク小太朝臣オホアソシ安磨ヤヌーロは選述センシュツせる古事コレキ記キ小傳デン人其趣
日ヒハ高タカく上カミ小崩モエ上アガして位ツキとさたぬツキ万古マンコ小ウツるるウツて動ウツき轉ウツることあり

○天は真は——る

○一

地ハ空中チクウ小ありて漂タビヨひ日小屬ニツキて轉ウツり旋マる月ハまゝ地小屬ツキて旋マる
りのゆゑ都岐ツキといふ各ヲを主ヲする神人あり星の中シノも神人ありて住
在シ星中のありて其の國土の如く山川草木万物とり小なるなる
おりよへしつて三神造化の首ハジメとほ二靈万物は祖ニたるしよ
天地がはやくまたまふてを得たる大陽は主宰と日神と大陸
は主宰と月神と星辰乃主宰と星神と也天子ハまはち
日神は神孫なり故小 天朝ハ万国の祖宗サイヤウなりて海外のいまご
嘗て及ツびふとつる西洋人曾て 天朝は風土を記して曰く
諸國土は肥澤樂地ハ北緯三十度より四十度の間小及ツよとほし
日本ハ其間小位して且萬國の極東方は境たる天神のうたふ

心小く其國小殊小徳惠と下し周廻シウケイハ峻サカシく烈ハゲシき荒海を廻
らして外國は侵し仇をむを防ぎまゝその地形をおかして小断
放ハクして諸乃嶋を合せしむがごとくありたりたるハ其國は産物と
異コト小生てその總國小通用さしめ日本一國外國は産物と望
まびその國小産出さる物小て満足すしめむやてするもして大
きまゝびちひさくび造りたるハ國を實ウしり強ツくしりむとて
故小人民おびびりて家居立つて其産物豊饒フニヨウ小して殊小稲穀
万国小卓越タクシツして美ウツクシく人氣は勇烈強盛ユウレツキヤウセイするややちまゝ萬
國小ありて國土をいよべて天地を造る神の日本小殊ツる徳惠と
給レりる徴シズメなりといへるハ其事物はかくかくすぐれたる中言語

○天はまはし

○二

古言ふも言靈の幸ふ國といへるがごとく、あは
言靈の妙小よりて、太古は傳説の真義と存することを得たり。
外國にもまゝ本教小ちりき傳説なきあは、神代紀を考る
小、天地位をきためて後、大國主少彦名は二神、天下諸國を經
營して、遂小常世は國小至る。文德帝は齊衡三年小及びて、其
靈石小よりて、天朝小歸來し、事ハ文德實録小詳あり。古言
底を謂て常世ハ脚底世界の義あり。亞墨利加
諸州のごとき、天朝と脚底相對し、故小あまきと常世といふの
亞墨利加の諸靈小て、石とりて神として祭祀といふこと、
少のく、あまき他より、女彦名を祭れば義あり。其のちハ神功皇

后は御製小、常世小塵は石立は、少名御神は、
あまき、あは神の靈ハ、石小よりてまをさるることあり。如是説ハ、
天朝のこひつり神人ありて、外國よはたして大造は積るる
りのあまき、あまき、問由まがもさはいあまき、少彦名は神の如き
ハ、あまき、天神の教養小、順をば、海外小天下して國土を開
く。是外國の神人小あまき、何ぞや、故小大國主は神起り小
至り、海外より來到して、力を戮せ心を一して天下を造る
ふより、まゝ、須佐之雄は神ハ、天乃壁立極免ぐり、印度
小、あまき、神と牛頭天王なども呼奉る。又西洋は國の傳
小、太初男女は神あり、男と安太年やのひ、女と延波とまの二

神國土と産ませりとの説あり。伊邪那岐伊邪那美二靈の御事小ちさきけふあふび。安ハ伊邪の約。太年ハ那美小て書紀小冉ナニ此字を用ひ給ふ小てといふ似つし。然アまタ年ムハ伊邪那美イサナミのよヨとトあアらラ託トクるルこコのノもモあアらラまマるル其安太年イサナミのよヨとトあアらラまマるル印度インまで釋迦シカ小法ホフを傳へし道士トシと阿羅羅アラ仙人センといひ。すべて印度小て。神仙センの類と阿羅羅アラのよヨとトあアらラまマるル。この阿太年アタニ此説シをシかカのノひヒきキをセるルもモいイふフ。漢土カン小てのよヨとトあアらラまマるル。帝印度テイ小てのよヨとトあアらラまマるル。梵天ホンハラうウつツまマくク造化サハカ三神サンを申マウ奉ホウふフ事ジをシとや又マハラ少彦シコヒコ名ナ此神コト天下テンを經營ケイするルがガおオもモとトあアらラまマるル。豈ナニ一神イツの所トコロ為ナるル。じや。齊衡三年十二月小。此靈コトの常陸トコのまマるル。未キ座ゼ小て時トキ小

此の神ミコハラ靈石レイシハラ左右サウ小二十餘ニハラ小石コトありて侍座シするルがガあアらラまマるル。あアらラまマるル二十餘ニ神カミの眷屬ケンと將チてのノでデはハせセるルことコトあアらラまマるル。へヘいイあアらラまマるル。あアらラまマるル小亞夫利加州アブ乃リ尼日多國ニジ小傳デンしたる天説テンの天朝テンの古傳コ小似ニするルがガあアらラまマるル。少彦シコヒコ名ナ此部類ブハラ神人カミより傳デンへルことコト説セるルことコトあアらラまマるル。りリあアらラまマるル。万国マン一統イツ小も如是コト傳説デンあるル。まマとトあアらラまマるル。故コトとトあアらラまマるル。やヤとトあアらラまマるル。甚シ謂イハるル。二靈ニ天柱テンハラ昏禮コンと制セイしたまふことコト。伊邪那美イサナミの神言カミ先マてテふフことコト。故コト小生ナマませる御兒ミありとくも御兒ミハラ數カズ小充チウ給タマひタ。還マて復マ天テン小上ウで具タ小其狀シと奏ソウ給タマふ時トキ。天神テン太タ占シと以モて婦人メハラ辭シ其己ミ小先揚マたるル。ふやあアらラまマるル。更マ小還マて

○天は之げら

○四

去_レ改て天柱と旋_ルへ_レやと_レ給へ_レ。言語は慎_{シム}べきや
凡_ソつへ_レ太古小百_レ再西亞_ヤ小_レ人類聚居_ルて天際と上_レ
窮_{キハシ}ひ_レてさ_レりさ_レける小_レ上帝其長傲と憎_ミ諸人の語音と
乱_レして其謀と得_ズし_レむ_レのへ_レ。天下小傳_ル處_レ傳説_ルは
真義は行端_ハありや_レと_レも同一_ニ説_スま_レる_レの故_ニる_レ。
去_レるに印度小_レ梵音_ヤのへ_レ梵天_ハ天降_リて傳_ヘたる
音_ナる_レと_レ梵天_ト造化の三神の御事_トは國_小てかく
呼_ナる_レと_レ天神の中_ニ傳_ヘたる音_ナる_レと_レさ_レる_レゆ_ニも_レや
天朝の正音小_レ親_一き音_ハま_レる_レことあり_トさ_レる_レ印度小_レ
天朝_ヤ似_ツる_レき説_マる_レにあり_レ釋迦_ト出_テ婆羅門_ノ徒_乃

立_タる_レ音と破_レ佛法と_レ弘_ビる_レ小_レ及_ビて古傳と失_ハる_レや
少_クく_レとい_ヘども_レは須弥_ハ説_ノの_レお_トき甚_クう_レあり_レは_レは
ゆ_ニかり理_ハ天下小_レ通_ジて_一たる_レ次_ク小_レる_レ諸説_ノの_レお_ト
じ_キを會通_シて其真義_ノの存_ルる_レや_レを考_ヘて_レ。

蓋天_ハ説

漢土_ニ天_ノの_レの_レ庖犧_氏周天_ハ曆度_と立_ルると_レも_レや_レ。
周公_ハの_レて_レ蓋_天ハ説_フづ_レ其説_ハ小_レ曰_ク天_ハ蓋_笠小_レ似_レ地_ハ覆_ハ
槃_ハ小_レ法_ス。天地_ハ中_ニ高_クして外_下北極_ハ下_ニ天地_乃中_ニは
其地_{最高}く_レ滂沱_ヤして四_小隕_也。三光_ハ隱映_{して}て_レ晝
夜_とる_レ。天_ノ中_外衡_冬至_ハ日_ハ在_ル所_ノと_レ高_キる_レ六_万里_。

北極下地外衡下地より高さ亦六萬里。外衡北極下地より高さ事二萬里。天地隆高相從ふ。日地と距るの常小八萬里。天小麗て平轉と。又夏此間日前行る道と分て以て七衡六間や。每衡周徑里數各算術によりて。勾股里差を用て晷影極游と推て以て遠近の數と。これ表股小得るりのる。亦といも。周髀小説ふ処小して。晋宋の曆志もかくれ如く記せり。漢土ハ亦小智力を巧小して。物理以推窮むる國風小て。古傳もたたり小す。異説紛々たる事猶國初より。今此清代や。もふまが。世は沿革ハ。天乃四ノ垂きて。尺ゆるとりて。蓋笠はあやといふも。

いやをうー。

宣夜は説

漢の秘書郎却萌先師は相傳を記して曰く天ハ了に質を仰てあきと瞻むハ高遠小して。極する一。眼瞶精絶と。故小蒼々然たる。と。旁遠道の黄山と望小せる青く。俯して千仞ハ深谷と察る小。如黒なる小。譬ふると。青々真色小非。黒々體ある小。あは。日月衆星自然小浮て。虚空ハ中。小生び。其行其止。多氣と須つ。是を以て七曜或ハ逆。或ハ任。或ハ順。或ハ逆。伏見常る。進退同。か。根繫る。所。故小各異なり。故小辰極常小其所。

○天はこけら

○六

小居て北斗衆星と西に没せば、根堤填星より東行一日
を西に行く事一度月八行く事十三度、遲疾情小任を、その
繫著する所なき事知べし。天體小綴附せば、再るべき事
なき事と宣夜書の晋書天文志小宣夜は書きて載る。
天固體モノヨリなりと云ふは其説少く精くる事なり。天小體あり
は謂るべし。そのへやも、天地未判は時、太陽をもち天は
體あり。故に體をもちする所の太古は遺傳なり。天地既小
定てより後、虚空をもち天小體あり。故に體をもちする
所の説の精くなる事なり。

渾天は説

晋書は天文志小載たる渾天儀は註はけり。鄭玄テイジンは説する其
説は天は鶏子は如く地は中黄は如く孤。天乃内小居と。天は
大小して地は小なり。天は表裏小水あり。天地各を氣小乗して
立ち。水小載らして行く。周天三百六十五度四分度の一も
ことと中分しては、半は地上と覆ひ、半は地下と繞る。
故に二十八宿半は見え、半は隠る。天乃轉る事車轂は
運る如くといふ。其の説出てより、吳は時中常侍王蕃シナカニヤウシワウバン
劉洪リウカウは乾象曆を傳へ、其法小依て渾儀を制し、論を立度
と考へ、宋は御史中丞何承天は渾象は體を尋ね、因て渾
儀を觀其意と研求し、以て天の形正圓小して水其下と周る。

少と悟る事有とて四方より水もれ證と引き日一夜水小入て
經る所焦竭と百川歸注して以て相補ふ不足する事へ其
蓋天の説ハ違失とふ所多とある事ハ可なりとも日水水中
出入ると見るとハいふ事取小たさざる事。

安天は説

晋は成帝咸康中小會稽の虞喜宣夜は説小因て安天論
と作るおりにて天ハ高くして無窮と窮り地ハ深して不測以
測ふ天ハ確乎として上小在て常安は形あり地ハ魄焉として
下小在て居静は體あり當小相覆冒とて一方より俱小方
圓ありハ俱小圓小して方圓不同の義あり其光曜布列して各

自小運行と事猶江海は朝夕ありて萬品は行藏ありて
おとつとつと安天は説あり。

穹天は説

河間ハ太守從聳が立ちたる所の論と穹天といふ説小曰く天は形
々穹隆として雞子は其際を幕とておとつと周は四海の表
小接し元氣上小浮び壁へハ區を西後て以て水を抑て没せざる
が如なるものハ氣其中小充つが故なり日々辰極と繞り西小
没して東小還り地中より出入せざる事天は極ありハ猶蓋は斗
あふがたや天ハ北乃方地より下き事三十度極は傾て地は
卯酉は北小在る事亦三十度人卯酉は南小在る事十餘万里

故斗極の下ハ地の中とせし當對乃天地ハ卯酉位のミロハ
黄道を行て極と繞り極ハ北ハ黄道と去るり百一十五度南
黄道と去る事六十七度二至ハ舍小所以て長短と為さるり
少クて多きを穹天ハ説きし。

昕天ハ説

吳ハ太常姚信^{トクノ}造る所の説と昕天^{トクノ}其言小曰く人ハ
靈其たる形最大小似り今人ハ頤前多く胸小臨て頂ハ
背と覆ふ事能はる近く諸と身小取る故小知る天ハ體南ハ
低て地小入る北ハ偏小高き事と又冬至ハ極低て運る南
小近き故小日人と去事遠くして斗人を去事近く北天ハ

氣至るが故小氷寒多り夏至ハ極起て天運北小近くして
斗人と去事遠く日人と去事近く南天ハ氣至るが故小蒸
熱多り極ハ立つ時日地中と行事淺く故小夜短く天地
と去事高し故小晝長し極ハ低く時日地中と行事
深し故小夜長し天地と去事下くして淺し故小晝短き
なりと之とあれを昕天ハ説きし。

平天ハ説

王充^{ワウリツ}論衡と著してかりて天ハ平正にして地と異なる事
なり然る小日上小出日下小入るりのち天小隨て轉運を
るはて天と視る小覆盆狀の如し故小日ハ上下と事

あつて地中と出入するがごとく似しを視るは、あつれば
とらりち日れ出る近けきあり、其入は遠くして復見ゆる
なり故小こまを入るや、運て東方小見まて近し故小
こまを出るといふや、平天は説や、此等の諸
説、人智は推窮むる所小して、一も實測を得たるの
な

漢末地動説

考靈耀小曰く地小四極あり冬至小北小上て西と事三
萬里夏至小地南小下て東と事三萬里春秋二分、其
中より地常小動て止む譬、人舟小在て座、舟行て人

覺せざるがごとし、又宋は邢昺ケイコウが再雅は疏小曰く地小升
降あり、冬至と夏至小至て降るあや三萬里夏至より
冬に至小至て升るごと三萬里や、一日は升降大約
百六十餘里なり、然るを地上は人は是と覺せざる何ぞや、列子
曰く天地密小移る疇々覺せし、漢土は百六十餘里、天朝
は二十六里餘里なり、考ふ小地動は説、太古は傳説く、神
世は傳説小、あつて大虚空は中小一物生て、其狀言がごとく、浮
雲は根係ネカレとらるまきかあや、海月クラゲは漂タカヨヘル湯時とあ
る、ハリとらりて、印度小て釋迦出世は時、既小地動は
説ある事、立世阿毘曇に見く、但須弥は説と主張を

ふがゆ多し。あは説とて選て外道は作説を以て置^エ。尼日^ニ
多國は傳説世小ひんまに至る。天下小通して古義はつ
はる事を得る。考靈耀は説は古傳小なりて人智
は工夫を加へたる説なり。

回々地球は説

回々の人^{フキク}札馬魯^{ツアニア}地球は説と造る。元史は天文志は曰く。
昔来亦阿子^{スイソライヤ}漢小地理志といふ。其制本を以て圓球と
七分と水といひ。其色緑なり。三分と土地といひ。其色白。江
河湖海を画き。其中小脈絡貫串し。小方井を画作し。以し
幅圓は廣袤道里は遠近を計ふ。今地球是なり。考る。

其國階は開皇^{カイキウ}己未は年小當りて馬哈麻^{バカマ}といふ人國と建曆と
作る。其法他邦とも密なりやいへ。一統志小曰く。默德那國^{モクドクナ}ハすま
の正回々は祖國なり。國王護罕^{ボカン}慕德^{ボク}生きて神靈小して大徳
あり。西域は諸國を臣伏せし。諸國尊号して別語被再々
猶華小天使と云ふがぶ。云々。其教專天小事を以て本といひ。
ちるも像は設る。其經三十藏あり。おらう三千六百卷。其書
體旁行小して篆草楷あり。今西洋は諸國もあきを用也。又陰
陽星曆醫藥音樂は類あり。も。輟冊録小も。元は耶律文正^{ヤリクフシ}
王^{ワウ}星曆ト筮雜算内算音律儒釋異國は書小おいて通せらる
る。嘗言西域曆は五星中國より密なり。乃ち麻答把曆を作

3. 蓋し回鶻曆は名なりといへば、麻答把といふは馬哈麻なり。
なほ回疆は西域聞見録小詳なり。あけさば故ふるに畧し

印度須弥説

俱舍等に説とすはと按ずる。諸は有情業増上カを以て、先最
下小おいて、虚空小依止して、風輪生じるといふあり。廣きこと無数、厚
きこと十六億由旬。かくは如き風輪、其體堅密にして、たゞ一大
諾健那神有て、金剛輪を以て、威と奮て懸小繋む。金剛は碎る
ことあり。風輪は損るといふあり。又諸の有情業増上カ
を以て、大雲雨と起し、風輪の上小澍り滴るといふあり。車輪のまじり、積
て水輪となり。かくはまじり、水輪いまま凝結せざる位小おいて、深き

こと十一億二萬由旬あり。問ふ如何なる水輪傍小流散せざる。答ふ有餘
師の説は一切有情業カは持るといふ所流散せざること。飲食する所いまま
熟寢せざる時、終小流移して熟藏小隨せざるが如し。有餘師の説
く風カは持るといふ由て流散せざること。又、^{アシカ}箒は穀と持るとい
ふあり。有情業カ別風起るといふを感るといふの水と搏撃して上
結て金となり。熟乳停て上凝て膜となり。故小水輪減じ
て唯厚きこと八洛又、餘は轉じて金輪となり。厚きこと三億二萬
二輪は廣量其數是同じ。謂く徑は十二億三千四百半。其邊を
周圍して數三倍を成す。謂く周圍は量三十六億一萬三百五十喻
繕那なり。是を風水金は三輪と名く。三輪の上は又地輪あり。

地輪小九山八海あり。以て六趣は依止處也。俱舍小曰く。金輪の上小おいて九大山あり。妙高山王中小處して住む。餘乃八周匝して妙高山を遠く。八山は中小おいて前七と内を名く。第七の山は外小大洲等あり。此外復鐵輪圍あり。周匝して輪はこぎ。一世界を圍む。持鉢等お七。唯金は所成なり。妙高山王ハ四寶と體とい。語次は如く。四南北東西ハ金銀吠瑠璃頗胝迦寶寶の威徳小隨て色空小顯ふ。故小瞻浮洲は空ハ吠瑠璃は色に似る。かくの如くは寶等何きもして生じ。亦諸は有情業増上力なり。復大雲起て金輪は上小雨ふ。滴は車輪の如く。積水奔濤して。其水する。うち衆寶種藏と威徳と具する。小由て猛風鑽擊し。變じて

衆寶類等と生じ。かくはこぎ。金寶等と變生し。已て復業力に。て別風と引起し。寶等と簡別して攝して。聚集せしめ。山と名し。洲をば。水は耳鹹と分ち。別して内海外海と成させしむ。九山はこぎ。金輪は上小住む。水小入は量する等。八萬踰繕那ユセンナ。換迷盧山水と出ること。亦あると。餘は八水と出ること。半は漸小卑し。謂く。初は持鉢山水と出ること。四萬。乃至最後は鐵輪圍山水と出ること。三百一十半。かくはこぎ。九山一々廣き量。各々自水と出ること。同し。天龍神鬼等は八部は種族。人非人等。地屈は有情。こぎ。小依て住するなり。次ハ八海と。俱舍小曰く。妙高を初とい。輪圍と後。中ハ中間ハ海あり。前七と名て内とい。七ハ中皆ハ功德水を具し。

かくれごとき七海初れ廣さ八萬持雙山は内邊は周圍は量小約
して其四面小おいて数各三倍と謂く各二億四萬踰繕那と云其
餘六海は量半々小狭し謂く第二は海量廣さ小四萬乃至第
七は量廣さ小一千二百五十此等は周圍は量と説さる煩多
と以ては故より第八と外々名く鹹水盈滿と量は廣さ三十二万二
千踰繕那より次小四大洲是乃ち人趣は所居より俱舎小曰く外
海は中小おいて大洲四あり謂く四面小おいて妙高山小對と南瞻
洲と北廣く南狭く三邊は量等し其相車は小南邊は唯廣
三踰繕那半より三邊は各二千踰繕那あり東勝身洲は東狭く
西廣し三邊は量等し形半月は如く東三百五十其三邊は各二千西

牛貨洲は圓なる事滿月は如く徑は二千五百周圍七千半北
俱盧洲は形方座は如く四邊は量等し面各二千より復八中洲
あり是は大洲は眷屬より謂く四大洲は側小各二中洲あり瞻部洲
は邊の二中洲と小は遮未羅洲此小猫牛より二小は笈羅遮未羅
此小勝猫牛より婆娑二百七十二小曰く此八中洲一々小復五百は
小洲あり以眷屬と云中小おいて或は人有て住し或は非人住し或
は空なるものあり立世阿毘曇小曰く再時小佛比丘小告迦樓
羅鳥は所住は四洲あり其東弗毘提南閻浮提二洲は中に迦
樓羅洲あり西瞿耶尼北鬱單越二洲の中間小迦樓羅洲あり
其の鳥洲は圍一千由旬形圓圓小して一切なる是深浮留林

あり迦樓羅鳥住して林中小あり洲外水は下を並小龍の
住處あり龍此地小居小あり佛說大仙相繼て並小深禪
と得て五通と発し天眼昧カウゲキ考カウゲキ數カウゲキ處カウゲキといへ今說
者カウゲキといふカウゲキとありカウゲキ學者カウゲキこカウゲキまカウゲキりカウゲキ佛說カウゲキと聞て
ありカウゲキまたカウゲキ世カウゲキはカウゲキ女童カウゲキを欺カウゲキくカウゲキ妄說カウゲキはカウゲキ何カウゲキぞ論ずる
に堪むとありカウゲキ故カウゲキにカウゲキあカウゲキげカウゲキてカウゲキ辨カウゲキずカウゲキるカウゲキのカウゲキはカウゲキ余カウゲキをカウゲキあカウゲキりカウゲキ須弥乃
說カウゲキ小カウゲキりカウゲキ大カウゲキ小カウゲキ真義カウゲキ小カウゲキ通カウゲキずカウゲキるカウゲキと得たる其說下カウゲキ小見えた

南閻浮洲は說

說者カウゲキは言カウゲキ小曰く所謂瞻部洲アジヤと亞細亞アジヤ歐羅巴ユウロツハ亞弗利加アフリカの
三洲カウゲキ是カウゲキあり又二中洲シヤマのシヤマ末羅マハラハ即ち墨瓦臘泥メカニカ加カあり其後

羅ラ末羅マハラハア墨瓦臘泥メカニカ加カ是カウゲキあり須弥山頂シユミハ方八萬由旬シユミありて
方シユミあり八天中央帝釋天と都て三十三天といシユミ第一須弥山須
弥海シユミ第二持チ雙山サウ持チ雙海サウ第三持チ軸山ヂク持チ軸海ヂク第四擔タン木山ボク擔
木海タン第五善見山ゼンケン善見海ゼンケン第六馬耳山バニ馬耳海バニ第七象鼻山サウビ象
鼻海サウビ第八持チ邊山ヘン持チ邊海ヘン日月須弥ジツゲツハ半腰を繞ふ日行ニチ小高
卑あり須弥及七山シユミ小廣狹高卑あり瞻浮洲カンフの地チ小高低差降
あり是故シユミ小日光を受ニチとシユミ伴トナリあり處チは晝夜とニチ長短有
しシユミ春分ハルノフより秋分アキノフ小至ニチ日北天ニチ下規ニチ小在て須弥ハ半腰廣
さ二萬由旬ニチ處と過ふ纔ニチ小一刻三十八分ニチにして甚日光を礙
ざると以て故ニチ小其照能南方ニチ極下小至ニチ北天日行最高ニチき

須弥は説と言りの其説窮するも其あまふまを天眼小属
てあふがめんは難とすあまを防ぐ猶人を嚇と小地獄は説を以て
するが如し今わづらうと是を辨せむわづらふ人は曉とせむらんりの
一二を謂むるも天漢ハ銀とたも微星は一帶小攢聚して其数無
量恒河破るふりのくかき今日月は交食小修羅手障といふ
りのハ特小夜異は蝕といふは説くりあふる佛説小天河
微星を以て帝釋は馬は口氣やすうが如きあまといふも説む佛
説小空居は大曜日月五星羅喉計都と首と別小六十一は大曜と
列ね總して無数は大曜を擧復別して四十一星王を列ね總じて百
千は眷属と擧復三十六億は衆生十二宮三十六宮及無数は大宮と

列ねるやいふもいふがうて四洲小各北極及南極あふとやと説
どかき今四洲小各兩極あふとやと豈空論小あふとむむあま共
あま等は説ハ考覈は一助やといふげはあましてやがむん唯が
やうとていふりのハ須弥半腰日光と礙とて説るると如何とて
はかた兩極下は夜國小おいてハ半年を晝也ハ半年を夜といハ北
極下は夜國ハ春分より秋分までハ夜なりりのとて黄昏過は
雀色スズメイロより今少く暗く秋分より春分までハ晝なり日輪は大
鬼燈籠ホウキを手に見えて出沒する海は面を周る居るやと南極下
は夜國ハ今少く及して秋分より春分までハ夜なりと春分より秋
分までハ晝なりと此事ハりのはまのひせとてやがむとよくあま事心

あるは其半年と晝やして日小出沒の時にいふなり須弥
あふが如く日體小出沒なきを見る事を得ざるべし須弥の半
腰二萬由旬は日光を障り一の刻三十八分五十七秒四微とて
夜國より日體と見ざる事一刺三十八分五十七秒四微なりたと
旭暉日出け前小發し餘暉日没後を照るとも日體は見え
ざる如何とせむ日體は見えざるは一刺餘なりは一
刺餘は夜にして半年の間と晝やると謂はしりゆは其説の
おや日須弥の半腰と周る小よは説ある何ぞいふ夜國
は一刺餘は夜ありて膽部洲の諸洲は一刺餘は夜あり
是現量小違ふこと最大なるものなり蓋須弥七金山四大

洲等の説は別小正義ありて甚意味深長は説あり下小是を
辨むと見よ

印度地動は説

天地位を定めて後天下小通して地動は説あり是神人相傳
やるといふて凡人は考へ出せる説小あり印度はあやふかの梵
王は教を傳へたる國小て古傳は片端かつく残さると所謂婆
羅門は後なるは地動は説とて居けるあやも同也釋迦
はあは婆羅門の後なるは後きて漢土は周は成王が十
八年小生きて出て前は婆羅門とて立たる昔は何事と証破
けるゆゑ太古は天地未判は時の狀貌小りやづきて須弥の説

と建立す。かた婆羅門ども唱へ居り地動は説と。外道の作説
やいひなす。事いちぢき故小立世阿毘曇小曰く諸は外道有
て是れ如くは説を作へ。是大地恒小去て息とや。是言應小答
ふ。此事然らびり。實小再らば上小向て擲がぶとき應小地小至
らざるべし。又諸は外道是れ如くは説を作へ。日月星辰恒小住
して移らび。大地自ら轉び。是と天は廻らうや疑ふ。是言應小
答ふ。此事然らびり。かた如くは射棚ひぢ小至らばや。又諸は
外道是れ如くは説を作へ。大地恒小浮て風小隨て来去
す。應小かくは答ふ。此事然らび。若實小再らば地恒小
併動せんり。再らば地何れ相と作して地住して動せんや。

説者ありて。大聖神通と以て後世かくは説起らむことと
前知して豫めことといふ。射棚ひぢの事とや。大なる事と云ふ。かた
あまかの婆羅門ども唱へ説と。よそげ小破したる説と云ふ。
り神通して去るやいふ。射棚小至らばやいふ。いふこと
さだ説いあるべし。いふこといふこと。視動は理と云ふ。か
者より。視動は奇見全書を按とふ。船は行小當りて其
馳ふ事甚速なりやいふ。船は全体小在て。常一小して
姿と見ふこと。櫓こは常小中央小あり。帆ほは常小櫓こ前小あり。
船首は常小先つて。櫓こは常小後またり。其餘は諸賊諸具小
至らば。各本所と守て擾乱と云ふ。其行と云ふ。

して疾速進退と共小する故小互小其行と見ふこと能ふ
面と轉じて濱岸小向ふに至り濱岸皆退行と見えその
多し船は行小當て試小一丸を取て檣上より落ると其丸の動を
見ふ小船人は目小正直小下落と見る如く見きて檣は本小止ふ
恰も其船は不動の時小是を落ると見ふ異なり然るも
是丸の實動は正直小下落と非ど屈回せる線路を画して
落ふにてぞ有けふ此時或は濱岸小人有て別小不動の
準として是丸の動と見ば實小其画とる所は線路は屈曲せる
と見ふとを得へ此理如何とるは丸初め檣上小あふとき
船と共小進行して其速勢を同くせば故小檣と辭して其重

りにて下落する時小至ふやいへども其得る所は速勢は
曾て消失せし既小檣と離れて中間は空中小在やいへども又猶
船と進行速と同一とるや其初檣上小ありし時小異なり今又
手とりて石と投る小其石既小手と離るやいへども猶能遠く
其理亦かたがたありとも檣と丸と其行と同一とるを以て船
人の此丸は屈曲は動と見ふや能はざる試小又一丸とて
船首より艦小向て弾とる小其視動は常小退行と進むとの
實行は進退は二様あり若丸は速勢や船は速と相等し時
丸は實行船首小向はる艦へ向はる自己は重とふるとして正直
小下落と見るは重カなるを空中小一所小けて不動する人

けり然まども船人は眼小其丸初弾は速小て艦は方小い
又且其重小にて屈線と画して下小を見り恰も船は不動
時小其力小て驛したと見り如くならへ唯濱岸の人不動
物と準として見り其実動と見り得べ丸は速船は
速小如き時其實行の船と同方に向て船小比と遅し然
まども船人は眼小其丸は行艦は方に向て初弾は力に因て
行を視り恰も不動船中在て弾ず如くならべ或
人弾丸既小速力を受り其勢必艦は方小實行せざら
ば必艦は方小對し船人其丸船首と艦は方小行を
見まども其勢必是も視動なるは濱岸は人却て艦動て

丸は方へ行を見へ是ま即ち其實動なり其實動は勢又猶此
船は迫まふ時小此丸と此力にて弾したは速勢小あやなる事
まよひて地動けども夫期小至ふは理もまよひて既小
現量かくれおやく地は動くあやと疑ひ

エニ日多國地動は説

吾天朝ハ殊小伊邪那岐伊邪那美二靈ハ大神ハ生成賜へ
御國天照大御神ハ生座不御國皇御孫命ハ天地共小遠長小
所知看御國に々萬は國小秀て勝きて四海は宗國たる故小人
心も直く正して外國は如く偽るあやまる故小神
代は真義人今日に傳ふ得る外國は如きた人太古乃

傳説中のへども、おのゝこころにふまへざるべし、みづからふまをやらう、既其
真義としらひ果てらるべし、人智を振立て推當小天地
万物は理と論どふ不及べし、ひやう アブリカ 亞弗利加州は エジプト 尼日多國小
傳うる處は天説の、其真義は趣を得るふが如く、あき他はし
少彦名は神と傳へたる真説はあはけらるる、後世は
測量を加へて、其説精くまらるる、後堀河帝は元
仁元年は、ヒタコラス 歐羅巴は學士比太古刺私の、エジツ 尼日
多國小渡る、在留をふくや七年ふく、遂におは國の天學と學
ひ得て歸國せり、其説小曰く、太虚小充滿せる無数の恒星常小
其文と守りて失をなせらる、其餘六箇は珠あるて太陽と繞

ふ、其行西にして東と、是と右旋と、遲速各同なり、是より
て天文種々小變は、是六球と名づけて六緯星、イ 我住所たる
地球も即ち其一なり、今地球と不動なるとして、太陽一歳小黃
道と行て、一面右旋と、イ 實ハ地球黃道とゆき、太陽と
繞て、歳々右旋一周と、イ 所謂六緯星ハ、イ 小土填
星、イ 小木星、イ 小火星、イ 惑星、イ 小地球、イ 小金星、イ 小太白星、イ 小
水星、イ 右六星は行、イ 西より東へ、太陽を中心小く、イ 繞
繞ふ、是と太陽は心と見え、其行道と、イ 黃道は邊、イ 數度
は間小ある、各別は線路と、イ 斜絡と、事、イ 黃赤二道の相交
ふが如く、イ 又よく各々全圖と、イ 見ふべし、然るも太陽の

心より見ふと云ふ。何まは星と太陽小近く。何まの星と太陽小遠
く。やうことと。分別と云ふと能く。唯何まの星一周と云ふと疾く。
何まは星一周と云ふと遅くといふ事を見らるるべし。太陽の
心より一直線と画して。六星行道は平面小正立せしめ。視者は線
小従ひ遠く太陽と去り離れて見らるる。始めて六星は太陽と離る
は遠近と見ふと云ふを得べし。と云ふと緯星太陽小近き。其天の圈
周短小し。且其行疾く。太陽小遠き。其天の圈周長大にして
且其行遅し。緯星は行は太陽は御さる所小して。太陽は即ち六
緯は至君たる。六星運行一周大約は百六十辰星三月。太白
八月。地球一歳。熒惑二歳。歳星十二歳。填星三十歳。右旋

る。と云ふと天体説は最もきりのにて。彼は太古刺私及其徒
は東方は國より學び得て。歐羅巴小移せし所なりと云ふ。

西洋天体は舊説

西洋はるは國産物少く。普く万国小交易と云ふと以て要とする
ゆゑ。天學小熟せざる。海路と渡る事自由ならず。故小天學ハ
万方小すんで精し。と云ふ。湯若望トウシヤクワン。羅雅谷ラヤコク。利瑪竇リマドウ。艾儒
畧アイジュリョク等が説と云ふと舊説より其説ハ天體ハ渾圓小して。恆小運
旋して以て地を裏し。地ハ彈丸は如く。水靜不動にして。天中小適
し。四面小人居せし。地球は量ハ周圍九萬里。直徑二萬八千六百
四十七里。一百五十九丈七尺一寸と云ふ。何小由て然る事を知らるや。

曰く、地は随て極星は高低あるが故なり。天を以て或は十重とし、最上は一層ありと常靜天と名く。諸天は主宰たる^{シユサイ}。其次は宗動天と以下諸重は天と帶轉と。此天は運南北二極に依て東より西に左旋して十二時小歴るなり。一周を其各天皆是一動小製せしめて運ぶ。其次は恒星天といふ。此天は本動あり。南北一近一距は動七年小して行くなり。一周を東西は正行約七万小二萬五千餘年小して行くなり。一周を其次は土星天二十九年一百五十五日零二十五刻小して行くなり。一周を其次は木星天約十一年三百十三日七十刻小して行くなり。一周を其次は火星天約十一年三百二十一日九十三刻小して行くなり。一周を其

次の太陽天は世界を照映し萬象光を取ふ。故小七曜は中小在り。約七次に三百六十五日二十三刻五分小して行くなり。一周を其次の金星二星は天はより大陽は天小從て行き。其次は大陰天は最地小近し。あるは舊説は大概小して明は熊壇石游子^{イウタンヒキイウシロウ}六等は諸家並に之を小しきとす。

西洋天体は新説

古來天學家ハ、天と動と地と靜と、地を以て天の中心とす。然るに新説ハ、天と靜と地と動と、且又地球の外小許多は世界あるは理をいふ。此新説なるものへ、^ユ尼日多國に傳ふるは古義小して、^ユはよりてきたるあや久し。歐羅巴の比

と得たるが故なり。緯星も自照するが故に、或は日光
を借るなり。是故に半邊は明くして、半邊は暗く、日光を得て反
照するが故に、其面は太陽の向ひぬる地球の向へる所の地
球の人見るが如くを得たり。是故に緯星は面常に圓滿なる
が如く、其明暗は界とあはる線路を望むべし。或時は直く、
或時は曲まる。故に其星の象、或は十三四夜は月の如く、又四五夜
は月が如く、盈虚大陰と其理と同づくべし。是其光は半邊の
地に向ふは多少に因て、かくれ如くは象とまはるものなり。是等は象
小なるが如く、緯星は体圓なる事、彈丸が如くなること、知
たる。地球ももやうに混圓なり。既小なる混圓にして、光と太陽

を受たるが如く、緯星も地球と見ふるは、もやうに地球も緯
星と見ふるが如くなるべし。地球も亦緯星なるが如く、六緯星の中
小して、土星と木星と地球との三星は、各傍に小星あり、常に相
伴て、遠く去り離るるが如く、おきと衛星と名け、又ハ月やといひ、
又ハ第二の緯星といひ、何れも其主星に伴て太陽と繞るべし。
又且各其主星と緯ふるが如く、地球は一箇に衛星あり、所謂太
陰是なり。地球に伴て一歳一周して太陽と繞る。又獨一月一周
して地球と繞る。太陰と見ふる、其光輝諸星に勝て、恃る能
太陽より其大と比し、おき太陰實小大なるが如く、非だ地と離る
るが如く、極て近き故なり。太陰離地と太陽離地と相等

く地球の人其体を望むも一微点に如くならずとも見ふおと
難くあべし六星は相離るる太陽離地は比数をべき非ん太
陰は實体の最小なるも其離地最近に故小視体かくは
おやぐ大なるしてそ有ける木星小四箇は衛星あり其行遅速
同くび又其主星と離るる遠近一きび猶六星は太陽小
おけらぐ如く最内星一周一日と四分日は三右旋より第二星三
日と十三時第三星七日と三時最外星十六日と十八時最内
星主星を離るるあや主星全徑二箇六分の五第二星四箇
半第三星七箇六分の一最外星十二箇あり土星小五箇の衛
星あり遅速遠近亦一きび此星甚微小して又土星と去る

おや甚遠き故小最上品は遠鏡を用ふ非ん觀察とそ
事能はんと又其負数五箇以上なりとも知べし最内星一口と八
分日は七第二星二日と十七時第三星四日と十三時第四星十六日
最外星七十九日と三分日は一右旋より最内星主星と離るる
あや主星半徑四箇と八分は三第二星五箇と五分一第三星
八箇第四星十八箇最外星五十四箇ありさて太陽は所在ハ
如何なる所ぞと尋るる先金星は本天ありと圍繞せしこと
ある金星は行を望むる或時ハ太陽は下にある或時ハ太陽の
上小あり其太陽と會する時小當て一回ハ太陽は前小あり一回
ハ太陽は後小あり其太陽は後小行て會せむとそ時小當

て地より是と望み、其体圓滿なるを望み、月小似し、金星も、其餘は緯星小同く、其体ハ暗くして、固有は光なき故
小、其明常小太陽と望み、方小生じ、是を以て其日小向へ、
方は半邊ハ常小よく照せども、日小背ける方は半邊ハ照せざること
能はざるものなり、然る小是星は盈満なる形を見ざるべき必
其太陽小向へ、半邊ハ、我地球は方にも向へ、
くなる事知るべし、此時金星離地、太陽離地、
ふ大と得べし、金星は地小満体と見え、
天、太陽より上小あふ時とあるべし、又其体虚小して照ること
能はざる、晦月ハおやく、是其通行するの天、太陽より下小

あふ時とあるべし、金星太陽は下小ありて、大陽小會する、
金星は其南北は度と同等なり、其体相重なるは、日や
月と毎朔同度小合會する、二道は交する處小近う、
ハ、蝕を見ふ、金星は本道と、太陽の黄
道と同一なるが故なり、然るも、金星は本道と、太陽の黄
金星の体、日輪中小おいて黒くして光るを見ふ、其黒点、日
輪の東方より始りて、西小行て終る、右既小金星は太陽を繞
ふ、金星常小太陽小伴て天と行る、
一回ハ太陽は左小あり、一回ハ太陽は右小あり、
小あふ時ハ、夕小西方小あり、太陽は右小あふ時ハ、晨小東方に

○天は、
○廿八

視徑ハ相會する時は視徑小於て殆七倍セリ。是其相對するの
時小近きやうに相會する時は離地の七分の一に當るが故なり。然ハ此
星地と繞るる非じて大陽を以て心として繞るると知べし。土木は
二星も亦右小類なり。然まば三星の天より大陽と心として地を
も包めふこと知べし。金水はつゞき夕伏合は前後小當て。退行も亦
ちりある。其の時金水より地球を望まば必其大陽や相對するは
前後小當て。退行も亦見べし。亦猶地球より上三星は退行と見
が如くも。上三星より土木火を以て。土木火は何より毎小大陽や
相對するは前後小當て。退行も亦あり。其の時土木火より望
まば地球夕伏合は前後小當て。退行も亦見べし。又猶地球より

下二星は退行と見ふが如くも。下二星より金水を以て。金星夕伏
合は時の地と離るるや遠し。さて金星は天より大なり。水星は天
小なり。是を以て金星は退行は度多し。水星は退行は度寡し。
然るるとき金星より見ふ所の地球は退行は多し。水星より
見ふ所の地球は退行は寡し。此理を推て上二星小及び見
まば其星地球は塵より外小ありて。遠きは退行寡く。近きは退
行多きは理あり。今上三星は退行と測る。火星十三度
許。木星十度許。土星ハ六七度あり。依て三星は上下内外と
分辨するを得て。土星を最外より木星を次より火星を又其
次より五星は行を地より見まば不齊なるは。進極て留る。後

あやとも知るべし然らば太陽の如何なる体にて如何なる星と一種
同類なりやと尋る小其体恒星と相類せる事と地球大なりや
と見ば太陽と見ば其体唯一微点は如くも太陽離地甚速
き故なり太陽離地はあやと遠大なりやと見ば恒星離日
小較まはる甚微なり地球歳々周行は輪と一經星と見ば
是も一微点は如く或は無かばやと見ば是を歳輪視差と
し是を測る小法ありといへども右は如く微多なり故にいづ
密測を得るのほしあやと諸家測を得る所は角度より一
分に及べりのはしあやとこれ恒星中にて我太陽世界小最近な
るりの小於てかればあやと最も最近なる星は離地

既小太陽離地小万倍せりと地球は所在移り動く故小一歳は
内に於て一回ハ一恒星小近づきあや極り又六月と過て其恒星小
遠ざかりあや極り歳々其行輪は長と往来とあや小極近なる
時やと見ば其星大小見ゆるやとあや極遠なる時やと見ば小く
見ゆる事もほし又二恒星中間は度分にてても変と見ゆるは
恒星は不動なるも我動けば彼必視動と見ゆる理なり小其然る
あやと見るあやと見ば恒星離日至遠なるが故小視動至微はて
察と見ばあやと甚難が故なり譬は今地上小二は立表ありて相去
るあやと遠く見ゆる小一人其正面小當て先は二表と離るあや
一萬歩ある処より見ゆると見其右進と近づきあや一歩ありて九千九

星はあやきりのまくや、あはべき。豈其体小く其光固有るべし。
其所甚遠くして目力に相及ざるを以て、故小相見ざる能はざる
小あはびわの無数は緯星の中小雜る在て、又何ぞ哉地球と
も獨人民万物は任所やとあるやあはむ。他は緯星は世界及
他は太陽小附屬ありむ。緯星は世界小も、形状容貌は同異
をよく知らば如何て絶て任者なくて止む。或は侍衛は星ありて、
其天の大陰をうけて得て、晦朔弦望は象とることも亦数多な
るべし。くだむれ説はあき寛政十年志筑氏が譯せる暗尼里亞國
は人奇兒氏著せる天學書中は説あり。奇兒全書はかの國
の千七百四十年小開板せり。天朝の元文五年庚申小當りこの

書申は年小開板せふを以てなり。小甚奇なる事あり。うもく
天地國土は初成の真義をあるもの古事記あり。こは書は本を
起し給ひし。天武帝は元年はうの國は千七百四十年小先づのあや。
既小千六十九年小して、壬申小當り。まは書は成り。元明帝
は和銅元年は戊申は年より、か幾許の年歳を隔て、まは幾
許は海路をへだてし。小其説はこは趣ひし。其書は天下
小出ふ。あはむも、同し申はせし。なるあや。ゆゑあはむ。まは奇兒
氏小次て得逸骨なるものあり。く。月は地と心してあきを旋る。
日ハ地と月とを心としてあきを旋る。金水二星ハ日と心してあきを
とめらる。火木土は三星次はあや。三天重思。日及地球を内

として其外と繞るといへば其月及地球五星を以て人居とてふ
説ハ一多りおは二説を西洋の新説といふべきなりと次第其説
精くなり近頃将来をふ所の西洋新法の天學ハ宿曜を以
て悉く世界とし地を以て星とて其説甚新奇にして臆断を似
たりといへども既小我本教小星中神人あふを説ときハ不
經は説やいへば又西洋小月中は人の長を測量とてふ
説あり佛教も日月宮中神人あふを説く彼方は千七
百八十三年は第十二月一日小「カルレ」にやふりの氣船小乗
して外ホあや千五百四十多トイ意須ス各六尺三寸三分
行ちや一里半小して降ふ同日アンゲリヤ暗リ尼里亞國は一貴士を

伴ひて外ホ夜小入て降るぬといへば所謂千七百八十三年ハ天明三
年の後世小至りてハ月中小入て遊ぶ者あむとてふ
いへば

難ズ西學ヲ説ハ辨

余曾て西學を難とて説を難とて論ありと今も今も
らりてハ小載せども蓋西洋は人ハ身海内とてぐる肉眼小側
得ふ處を以て説としつは天學いも精カる時ノ書ハ引
引て座上小論とてふがやきりけふありてハ學者自ら其可ハ
とあハい

天説會通

天學は諸説紛々たるやいへども、各理義を以てしむべし。大道ハ天下小通して一なる也。余諸説と并せて真義は存する處と考ふ。小漢説のおとき、渾天は説出ふ及びて、西洋小の處は舊説の儀狀頗る同し。唯印度は須弥は説の大小諸説小異なる。蓋玄妙は理あるも、よつて按ぶると、須弥は説のおとき、天地初發、日月國土初めて形を成し、時は一つの傳は國小ありけふと原本として、かればよく説まざるのなるべし。如何と云ふぞ、釋迦出世は時とて、地動は説あるといふも、射棚小至らざる事とおもひて、信ぜむかへつて地動は説は上小出て、天地初發は時の大土は狀貌小なりて、かれば如く廣大なる説と立

るものなるべし。天地初發、日月國土初めて形を成るとき、大虚空之中、小一物生て漂蕩時、其中より狀葦牙は渥中より萌騰ふりのあり、時とて、萌騰ふりの、即ち天日と言ふ也。須弥は即ち是れ時の天日と云ふ也。故小其説小曰く須弥山頂、方八萬由旬、方おふ八天、中央帝釋天と都て三十三天と云ふ是なる也。其次は山海は、後小金星、土星は四箇のものと指さる。四大洲は、地球、火星、木星、土星は四箇の傳は、地球の地球及木星は、土星は、衛星、所謂月は傳へたるべし。天は正語阿米言ハ葦芽萌る、即ち是太古天日は稱する。今所謂互牽するの、是と云羅と

いへる萬葉集は歌小三空往く月讀壯士と詠ふがとき本
義と失はざるのなる。漢土も古く天と月を即ち日事と
須弥と三十三天と。天は梵語と云はれり。即ち日宮なり。
日とばして天をせざるもいふべし。されば須弥と。即ち日宮なり。
そと天日ハ所謂玻璃は寶火精は質といふがとき質をて
され清輕と昇る勢あり。既小清輕と昇るのありやまハ
重濁で降ふりのとき事と得べ。既小重濁で降るのありやま
と。又其中より崩上りのとき事あり。天先成て地後小定
ふといふ事といふなり。其最前小降るのありやまと後世小土星とい
次小降ふりのありやまと後世小木星とい。次小降るをいふ事と

後世小火星とい。次小降ふりのありやまと後世小地球とい。佛説小
所謂北鬱單越東弗婆提西瞿耶丘南閻浮特四大洲ハ此
四世界は事なり。次小降るのありやまと後世小金星とい。次小降
ふりのありやまと後世小水星とい。佛説小七金山海といふは二世
界の内は天日小附屬してありける時傳へるべし。然る小は二
世界ハ地より後まで成りしものあり。四大洲と異なるふりの小説を
一たふさるべし。之をて土星は中より五箇なるは衛星といふ
木星は中より四箇の衛星といふ。地球は中より一箇は衛
星といふ。佛説小ハ四大洲の間小加樓羅洲ありと説け
ふなるべし。かくは如く昇るの降るの既小位を定め土木火

地金水は六緯ハ天日と心ふして繞リ。衛星ハ其主星を心
ふして繞ル。世小いふと心ふして海位を定めざるやまは趣
とらむあやあたは須弥をもち天日ハあやまるとあは別小
須弥あふがとく説ふたよハ船小乗まの。既小此岸を離る
やとといはる。離まは心あふがとく。釋迦須弥ハ説を王張
いたふあや。據あふあやと見つべ。あまを神世傳來ハ真義小微
さる小古事記あつちにはいめはるるに。天地ははらめはま
高天原小けらとあや神ハ御名ハ天之御中主神次小高御産巢
日神次小神産巢日神此三柱ハ神ハ。さるひととがなはして
御身とかり給ひき。ハ造化ハ三神ハ御傳説より。俱舎小劫

初ハ時ハ人ハ。さる色界ハあや。諸根缺るあや。は。端嚴ふして
身小光明と帯び。空小騰るあや。自由さる。といへるあや。いどく
神人ハ。さるあや。如くなる小造化三神のあま。つねの神人ハ
あや。さる。て。人ハ肉眼小見奉ふあや。と得ざる。あや。御身と
か。給ひき。いへ。あや。地ハ。糞く。浮脂ハ。大虚
空小水月。と漂へ。時小其中。と。草牙ハ。朗騰る物小
因て成座る神ハ。御名ハ。宇麻志阿斯訶備比古遲神。次小
天之常立神。此二は。ハ。神ハ。獨神成座。て。御身と隠し
給ひき。ハ。即ち天日とあや。形とあは。傳説より。次小
とあや。神ハ。御名ハ。國之常立神。次小豊雲野神。此二柱

の神も獨神なりはして御身と隠し給ひきよきま即ち洲壤
をいりて形とさせしあやを其主宰は神小なりとて語を傳へし
あや小國之常立神と天ノ常立神小對せし神小して常々
底は古語をよきとばしあやのいふあやと地は極底に即ち金星
なり故小なる天地よりあやの時其最前小降るりの金星なる
事と豊雲野神と豊雲の稱辞雲の組とも響とも國とも活
きて迷具武なるの具武小同じ野の主とも通ひて別小添ふ
稱辞して此御名は義ハ地ハ形と成るたふといふなりあま
即ち木星は主宰は神なるあやと知るべし次小なりはる神の
御名ハ宇比地迹神次小妹須比智迹神宇ハ泥なり迹を

奴と通ひて沼る須ハ土は水とよきたふといふなり比地ハ土
土といふあま即ち火星は主宰は神なるあや知るべし次小角杓神次
小妹活杓神角杓ハ葦なるの生初ふと角杓とよ小同じ杓
いりてなまきくびるあやとよ小同じ活杓ハ生活動き初ふ由は
御名なりあま即ち地球は主宰は神なるあやとよ小同じ生
活動き初る由は御名は義を以て地球は動くあやと覺はば
よきとよ小活杓神と神祇官ハ神中にも生産日ハ神とて
齋給へるあやとよ小意富斗能地神次小妹大斗之辨神
大ハ稱辞斗ハ處能ハて小とは地ハ比古遲ハ遲小同じ辨ハ男
神ハ地小對て女神と尊む稱なりあま即ち金星は主宰は神

○天はとけしら

○卅九

かろ事とるべし。次小淤母陀琉神。次小妹阿夜訶志古汲神。
淤母陀琉^{オモダ}了^ル御名は義^{ニゴ}八万葉小。あえ初ちや。ひつきとせ
小多程申^{コト}つむ。この美はみおもと。やとらるがおやく^{カシ}訶志古^コ。
畏る意^ネ。涙^ナハ名^ナ兄^ユれ約^{ヨク}なる。あき即ち水星は主宰は神を
ふあ^オとあ^オべし。此星天日小いと近^{チカ}くして。面^{オモ}も足^{タリ}て見^ミゆ^ユ小や。
さて次小なる。い^イでほ^ホせ^セ伊^イ邪^サ那^ナ岐^キ神^{カミ}妹^{イモ}伊^イ邪^サ那^ナ美^ミ神^{カミ}あは
二靈は大神^{オホカミ}と^ト天神^{アマノカミ}諸^{モロク}は命^{ミコト}り^ニて。漂^{タラ}る^ル國^{クニ}土^{ツチ}と^ト造^{ツク}てか
こめ成^{ナリ}給^{タマフ}ふて。今^{イマ}は^ハお^オやく^クい^ハま^マる^ルけ^ケる^ルの^ノか^カり。三五層^{サンゴ}記^キ小^コ天
日^ヒ小^コ高^{タカ}き^キあ^アや^ヤ一^{ヒト}丈^{タケ}。地^チ日^ヒ小^コ厚^{アツ}き^キあ^アや^ヤ一^{ヒト}丈^{タケ}。盤古^{イハコ}日^ヒ小^コ長^{ナガ}き^キと
一^{ヒト}丈^{タケ}が^ガく^クは^ハあ^アき^キあ^アや^ヤ一^{ヒト}丈^{タケ}八^{ヤチ}千^チ歳^{サイ}小^コして。天^{アメ}數^ス極^メて高^{タカ}く。地^チ數^ス極^メて

深く。盤古極^{イハコ}て長^{ナガ}く。後^{ノチ}小^コと^トる^ルい^ハち^チ三^{サン}皇^{クニミ}あ^アり^リ。數^ス一^{ヒト}小^コ起^{タリ}る^ル。三^{サン}小^コた^タら^ラ。
五^イ小^コさ^サる^ル。七^{シチ}小^コ盛^{シメ}小^コ。九^ク小^コ處^{トコロ}小^コ。故^{ユヘ}小^コ天^{アメ}地^チと^ト去^{ユク}ふ^フあ^アや^ヤ九^ク万^{マン}里^リと^トあ
ふ^フ説^{トク}る^ルや^ヤい^ハま^マる^ル本^ホ教^{コウ}小^コ遠^{トホ}か^カる^ルの^ノか^カり。神^{カミ}代^{ヤシ}紀^キ小^コ星^{ホシ}神^{カミ}番^{バン}、
背^セ男^ヲと^ト誅^{ツメ}や^ヤ。即^{ソレ}ち^チあ^アり^リ星^{ホシ}中^{ナカ}小^コ住^ス在^シと^トる^ル神^{カミ}と^トい^ハふ^フ。然^{シカ}る^ル小^コ數^ス
千^チ歳^{サイ}は^ハ下^シ小^コして。西^セ洋^{ヤウ}は^ハ人^{ヒト}宿^{ヤク}曜^{ヤウ}あ^アり^リく^ク世^セ界^{カイ}な^ナる^ルあ^アと^ト測^スる^ル得^{トク}
て。千^チ歳^{サイ}不^フ易^イは^ハ説^{トク}と^トた^タて^テけ^ケる^ルい^ハま^マる^ル。き^キあ^アと^トる^ルび^ビや^ヤい^ハま^マる^ルも
くも。裁^{サイ}本^{ホン}教^{コウ}は^ハ最^{モト}も^モ尊^{ウツクシ}き^キあ^アと^トる^ルべし。且^ナ此^{コノ}玄^{ケン}妙^{ミョウ}は^ハ理^リと^ト聞^クて^テも。
造^{ツク}化^カ三^{サン}神^{カミ}は^ハ大^{オホ}智^チ慧^ヱと^ト以^テて。建^{タテ}立^テ給^{タマフ}ふと^トら^ラは^ハ天^{アメ}地^チな^ナる^ルあ^アや
と^トあ^アる^ルべし。あ^アま^マい^イみ^ミき^キあ^アと^トる^ルあ^アり^リ尊^{ウツクシ}き^キあ^アる^ル。

